

【78】

氏名(本籍)	磯	博	康	(東京都)
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	博 甲 第 397 号			
学位授与年月日	昭和61年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当			
審査研究科	医学研究科			
学位論文題目	地域における脳卒中予防対策の評価に関する研究 —長期間対策を実施した地域と新たに対策を開始した地域との比較検討—			
主査	筑波大学教授	医学博士	牧	豊
副査	筑波大学教授	医学博士	三 澤	章 吾
副査	筑波大学教授	医学博士	山 口	誠 哉
副査	筑波大学助教授	保健学博士	加 納	克 己
副査	筑波大学助教授	医学博士	杉 下	靖 郎

論 文 の 要 旨

目 的

地域住民を対象とした脳卒中予防対策は、昭和 30 年後半より我国では地域医療の実践活動として各地で実施されてきた。そして、その対策が長期間実施された地域では脳卒中が明らかに減少したという報告が行われている。

しかし、この減少は果たして対策実施の直接的効果なのか、あるいは最近の日本の社会水準の向上に伴う環境要因のためなのか、それとも両者の相乗効果なのかに疑問が残る。そこで積極的な予防対策効果の客観的評価を明らかにせんとしたのが本研究である。

対象および方法

昭和 38 年以来、対策実施地区 I 町と昭和 56 年以来開始した K 町とを比較した。I 町は、秋田県衛生科学研究所、大阪成人病センター、最近では筑波大学などの協力のもとで町、保健所、医療機関、住民組織などが組織的な対策を実施しているところである。K 町は筑波大学、大阪成人病センターの協力のもとで略 I 地区と同じ方法で実施されている地区である。対象は今回は男子のみとし、I 町では 30 才以上、K 町では 40 才以上を対象とした。

検診項目と判定基準は主として、WHO および日循協基準に従った。

対策の効果判定の指標として、脳卒中の発生率、検診成績、栄養摂取状況などの環境条件の 3 つ

とした。

I町では昭和39～43年期間と昭和54～58年期間の成績を、K町では昭和56～58年期間の成績を用いた。

成 績

1. 脳卒中の発生に関する検討

I町では20年前に比し、40才代以上でいずれの年齢層でも減少し、しかも、60才代以上では、現在のK町より減少している。

2. 循環器検診の諸成績

最大血圧値は、I町では20年前に比し各年代とも10 mmHg以上の低下を示した。また現在のK町に比し各年代とも低値を示した。

最小血圧値は、I町では20年前に比し各年代とも低下した。しかし、K町のそれに比し各年代とも高値を示した。

3. 眼底所見, Scheie分類2度以上を異常とすると、I町では20年前に比し各年代とも有意に減少、しかし、K町のそれと比較すると40代では同率であるが、50代60代では高率であった。

その他、血清総コレステロール、肥満度、栄養摂取状況などを検討したが、I町の20年前と現在では著しい改善がみとめられた。しかし、現在のI町とK町ではほぼ等しい。

考 察

I町の現在の60才代は対策開始当時40才代で長期間継続して高血圧管理を受けてきた。一般に60才～70才代は脳卒中好発年齢層である。このことを考慮すると現在のI町の脳卒中発生率が60才代でK町に比し低いのは注目されるべき事実である。

最小血圧や眼底所見が現在の60代以上で、I町の方がK町に比し異常が多いのは、対策が行われる前に当時のI町の40才代がすでに動脈硬化がすすんでいた事実を示すものと考えられる。

すなわち、長期間、積極的な対策が実を結んだものといえる。

一方、K町に関しては、今までに積極的な対策が行われておらず、現在のI町に比し、最大血圧の平均値が40代～60代の各年代で高値を示し、脳卒中発生率も60才代で高率を示している。したがって、今後、K町においても組織的な高血圧管理が進められるなら、脳卒中発生率の減少が期待される。

審 査 の 要 旨

今日の情報化社会における医療知識の普及度は20年前のそれとは著しく異なる。また、生活水準の向上も全国的にみとめられる。本研究の目的は全国各地で行われつつある脳卒中対策実践の意義と価値を分析かつ証明したものとえよう。本論文は多くの共同研究者や巾広い対策実施の協力者によって支えられた成果であることを忘れてはならない。

よって、著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。